

先生主催「学び直し勉強会」 in 首都圏

進路成就率向上を目指して—— 学習力を育む「学び直し」のあり方を考える

学習指導要領で「義務教育段階での学習内容の確実な定着」がうたわれ、また、生徒の学ぶ姿勢（学習力）を育む指導としても改めて注目されている「学び直し」。ただ、必要性を感じていながらも、生徒指導上の問題や現場の抵抗感などから、学び直しの導入に踏み出せていない学校も少なくない。今号では、2014年11月、首都圏の先生が集まり、学び直しの取り組みと成果、及び課題を共有した「学び直し勉強会」の様相をレポートする。

「学び直し勉強会」は、千葉県の県立高校校長を務め、現在は千葉県総合教育センター所長の百瀬明宏先生の発案により生まれた教師間ネットワークである。2013年2月、千葉県内の高校の有志が集まり、学び直しの取り組みや成果、課題を共有したのが始まりだ。県内で数回実施した後、更に幅広く知見を得るために、14年11月、千葉県に加えて、参加校を埼玉県、東京都、神奈川県に拡大して実施。21校32人の教師が、取り組みの共有と意見交換を図った。

「学校現場では、学び直しの必要性を感じながらも、生徒指導上の問題や現場の抵抗感などから学校全体の取り組みに至らない場合も少なくありません。しかし、『何とかしなければ』という思いを抱いている先生は、どの学校にもいます。複数の学校が集まってネットワークをつくり、先進校のノウハウを共有することで、学び直しの取り組みを広げるのが、この勉強会の目的です」（百瀬先生）

百瀬先生が開会の趣旨を述べた後、ベネッセコーポレーションの担当者から学力下位層の抱える進学・就職上の課題や学び直しの全国的動向についての説明が行われ、続いて各校の取り組みが発表・共有された。当日の発表のうち、東京都、千葉県、埼玉県の各校の事例を紹介する。

事例1 東京都立東村山高校

八重樫麻里子先生

学び直しの内容を反復学習させることで 出来た感を持たせる

発表者



東京都立東村山高校

八重樫麻里子

やえがし・まりこ

2人担任制導入も大きな改革の1つ

*1 進学応援型エンカレッジスクールは、基礎・基本の学習を重視する学校。入試に学力検査はなく、30分授業や2人担任制、少人数授業などの教育に特徴がある。
*2 ベネッセの教材の1つ。学習力を身に付ける、小・中学校範囲の学び直し専用のプリント教材。

でした。本校には精神面の弱い生徒が多く、学習・生活両面で支援を厚くすることが必要だと考えたのです。

学び直しはベネッセの「マナトレ」

(※2)を活用しています。国語・数学は8時30分から10分間の朝学習で、学級担任が支援しています。英語は、30分授業で週3回、「マナトレ」に取り組みさせています。基礎編は1学期中に終了させ、標準編は夏休みの宿題としても課し、2学期中に終わらせるようにしています。理科・社会は、30分授業で学校が独自に作成したプリントに取り組みさせています。学び直しの内容は通常授業でも反復学習し、定期考査の範囲にも加えることで出来た感を持たせています。

学習環境づくりも行っています。例えば、静かな環境で朝学習に取り組むために、遅刻した生徒がばらばらと入って来ないよう、8時30分に玄関を閉めています。遅刻した生徒は朝学習終了後に教室に入れますが、遅刻が5回以上続いた生徒には朝の清掃を行わせるなどの課題を与え、遅刻数の削減を図っています。

学び直しの教材は簡単な内容から始まるので、生徒は学習意欲を持つ

て取り組んでいます。また、教師が机間巡視を行う安心感から、進んで学びに向かう状況が生まれています。そうした姿勢は学力にも反映され、

年3回実施するベネッセの「基礎力診断テスト」(※3)では、回を追うごとにDゾーン(※4)が減っています。

進路未決定者も減少傾向にあります。キャリア教育の成果もあるとは思いますが、中学校で出来なかった教科学習が、学び直しによって分かるようになり、「自分もやれば出来る」という実感が持て、自信につながっていることが大きく影響していると捉えています。中学校時代は何事にも投げやりだった生徒が、何とかするのはないかという希望を持って、次の進路に向かっていく姿が見られるようになったことをうれしく思っています。

今後の課題は生徒の自立です。きめ細かい指導を行ってきたことで、3年生になっても教師に頼る意識が強く、進学・就職先への提出書類の作成も1人では出来ない生徒がいます。生徒を自立させるためには、教師がどのように手を離していけばよいのかを、今後考えていくつもりです。

事例2 千葉県公立高校3校

百瀬明宏先生

基礎学力向上だけでなく、生徒指導の成果も見られる

今回は千葉県で実績を上げている3校の取り組みを紹介します。

1校目は、全日制総合学科の千葉県立安房拓心あわたくしん高校です。卒業生が就職先から学力不足を理由に解雇されたことをきっかけに、10年度、当時の校長の発案で学び直しを始めました。「チャレンジタイム」という名称で、朝のSHRの前の10分間、1年生・2年生前半は国語・数学の「マナトレ」、2年生後半からは就職試験対策用の問題集に取り組みせました。管理職も含めて教師全員で指導に当たった結果、学力不足による就職試験での不合格者が大幅に減っただけではなく、1時間目の授業に落ち着いて取り組めるようになるなど、学習力にも変化が表れました。

2校目は、私が校長を務めていた千葉県立生浜おひま高校です。全日制・三部制定時制の併置校で、生徒の進路は多様です。私が着任した時の進路

決定率は全日制95%、定時制62%でした。教師からは「就職試験に合格できない」「進学後が心配」など、生徒の学力不足を危ぶむ声がありました。学び直しの実施に賛成する教師が大半でしたが、具体的な実施方法となると、意見はまとまりませんでした。そこで、学び直しを先行実施していた県内4校と勉強会を開き、首都圏の先進校の視察を重ねた結果、「学習力が身に付く」「基礎学力の定着が見えてきた」といった成果があることが分かり、13年度、全日制の

発表者



千葉県総合教育センター所長

百瀬明宏 ももせ・あきひろ

*3 GTZ (学習到達ゾーン) という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性 (自我同一性) を測る、ベネッセの生活・学習指導用テスト。
*4 「基礎力診断テスト」では、生徒の学力はGTZ (学習到達ゾーン) として、A1からD3までの12段階で評価される。Dゾーンは「基礎・基本養成レベル」を指す。

1年生（2学級）で「マナトレ」を始めました。

「マナトレ」は、月・火・木曜日の6時間目終了後、SHR前の10分間で実施しています。教科は、今週は国語、翌週は数学というように週替わりにし、担任、副担任、学年主任の3人体制で取り組みました。効果検証はこれからですが、生徒は落ち着いて学習に取り組んでおり、必ず成果は出ると期待しています。

3校目は、千葉県立小見川高校です。就職率の高さに定評があった同校でしたが、09年度から進路未定者が急増した影響もあり、11年度から2年連続で高校入試が定員割れになりました。そこで、毎日1時間目の前の30分間に学校設定教科「いぶき」（週150分3単位）を導入。国語・数学・英語について、小・中学校段階の基礎問題を教師が解説し、問題演習に取り組ませました。

導入時には先生方に少なからぬ抵抗感もあったようです。特に、学級担任や3教科の教科担当は負担が増えることを心配していたため、「いぶき」は副担任が担当することになりました。評価は生徒の意欲や学習姿

勢を重視し、休まず出席すれば5を付けました。その結果、退学者数や欠席者数、特別指導件数は半分以下に減少。高校入試の定員割れも解消されました。

3校に共通しているのは、生徒の基礎学力の向上に加え、落ち着いた学習態度が育まれ、生徒指導上の問題も改善されるという学習力面での成果が見られたことです。一方、課題は実施体制の確保です。全校体制で取り組めるように共通理解を得られた学校ほど、確実に成果を上げているからです。



事例3 埼玉県立鳩山高校

黒田勇輝先生

鳩山高校ステップアップ・プロジェクトに 学び直しを位置付け、生徒の学びを支援

本校は普通科と情報管理科を有する高校です。卒業後の進路は進学と就職が半々で、13年度の進路決定率は100%でした。本校の特徴は教師の面倒見の良さにあります。14年度には、就職・進学後も困らない学力と、社会で必要な生活習慣・マナー・職業観の育成を目的とした「ステップアップ・プロジェクト」を発足させました。本校がある地域は、県内でも特に少子高齢化が進んでいます。生徒募集は年々厳しさを増していて、地元中学校にアピールできる特色を打ち出す必要があったことも、この取り組みを始めた理由です。

本プロジェクトの中心となる取り組みは学び直しです。毎日6時間目終了後のSHRで、国語・数学・英語の「マナトレ」に日替わりで取り組みさせています。生徒は10分間で問題を解いて5分間で答え合わせをします。その間、学級担任が机間巡視

を行います。更に、生徒の基礎学力を測るために、「基礎力診断テスト」も年2回行う計画です。1回目は「マナトレ」に取り組む前の5月に実施し、2回目は3学期に実施して、学び直しの効果を測る予定です。

「ステップアップ・プロジェクト」の中には、従来から続いている取り組みもあります。その中でも、生徒の学びにとって大きな力となっているのが、「学生サポーター」です。これは埼玉県の教育事業の1つで、近隣の大学生11人が週1回、1年生の

発表者



埼玉県立鳩山高校教頭
黒田勇輝
くろだ・ゆうき

各クラスの国語、数学、英語の授業にチーム・ティーチングで入り、机間巡視でつまづいている生徒に声を掛け、個別指導に当たっています。生徒にとっては、校外の大人と接する良い機会にもなっています。

学び直しについては、今年の実施初年度ですので、具体的な成果は今後検証し、次年度の指導に反映させ

ていきたいと思っています。課題は、

学び直しの効果的な実施方法や体制の確立です。全校で共通認識を持つて取り組みを始めましたが、生徒の習熟度に応じて細かく指導している学級と、そうではない学級があるのが実情です。今後、改めて学校全体で学び直しの意義を共有し、取り組みを充実させていこうと考えています。

意見交換会

立ち上げ時の苦労は必ずある まずは一歩を踏み出すことが大切

各校の事例発表では、参加者から様々な質問がなされた。最も関心が高かったのは、担当者をどう決めるかという点だ。特に、埼玉県立鳩山高校の「学生サポーター」については、実施体制や効果の点で多くの質問が寄せられた。東京都立東村山高校に対しては、2人担任制の効果やデメリットについての質問が、百瀬先生には校内の組織づくりについての質問があった。学び直しの内容だけでなく、どのように校内の意見を集約

し、教師の負担をあまり増やさずに導入できるかという点に、多くの学校が苦慮している様子が見られた。

また、意見交換会では、参加者から自校の取り組みの紹介もあった。千葉県立浦安高校の渡邊啓之校長からは、6年前に教頭を務めた千葉県立姉崎高校の取り組みが紹介された。姉崎高校では教師が5教科の独自教材を作成。毎日5時間目の授業を学校設定教科「マルチベーシック」として、全校体制で学び直しを実施し

た(本誌09年9月号「指導変革の軌跡」参照)。「学校が組織的に取り組んでいる姿を生徒や保護者に見せ、学校全体が本気であることを示したのが功を奏した」と渡邊校長は振り返る。

千葉県立松尾高校の磯貝真規子先生は、ボトムアップで学び直しを導入した経緯を明かした。赴任初年度、1年生での学び直しを提案。国語・英語の授業中の10分間で「マナトレ」に取り組ませた。1年間続けた結果、「勉強が分かるようになった」「『マナトレ』をやってよかった」という生徒の声が聞かれるようになった。現在は「勉強部」という部活動を立ち上げ、磯貝先生が顧問となって学びの輪を広げているという。

この日、事例発表も行った神奈川県立大和東高校の渡邊哲也校長は、学び直しを始めたきっかけを語った。ある高校の化学の授業を見ていた時、教師の教え方は上手だったが、いざ問題を解かせると、生徒の手は分数の計算が出来ないために止まってしまったという。どんなに良い授業をしても、生徒が小・中学校段階の学習内容でつまづいていれば、力を伸ばし切ることは出来ない。「各教科の

努力に任せるのは限界があり、学校全体でやらなければならぬ」と痛感しました」と渡邊校長は振り返る。

大学入試の変化や就職状況の好転を受け、全国と比較すると首都圏では、進路決定率“100%”を目指す環境が整ってきた。そうした中、本勉強会に集まったのは、進路決定率“ではなく、進路”成就率“にこだわって指導に向かう先生方である。勉強に自信がない生徒を、「学び直し」を通して机に向かわせる。出来た感を持たせることで、学ぶ姿勢である「学習力」が身に付く。進路力と併せて学習力を身に付けることが、進学や就職における一人ひとりの希望進路の成就に結び付く。

忘れてはならないのは、成果が出始めた学校も、立ち上げ時の苦労があったからこそ今があるということだ。まずは一歩を踏み出し、粘り強く取り組みを継続する。その上で、生徒の変容を実感できるようにすれば、教師たちの意識も1つになっていく。一歩を踏み出す勇気と継続することの意義を多くの先生に与えて勉強会は幕を閉じた。